

ホロライブ・ゾンビーズ

鉄の撻

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ホロライブとゾンビモノを掛け合わせてみました。

最初はホロックスがメインで後々他のホロメンも登場する予定です。

目 次

プロローグ 崩壊

第一話 始まり

第二話 ホームルーム

第三話 違和感

第四話 何かがおかしい

第五話 Time Is Coming

第六話、崩壊

第一章 学校編

第一話 怪物

プロローグ 崩壊

第一話 始まり

数日前……確か世界がおかしくなったのは、そのくらい前の事だつたと思う。

テレビやゲーム、アニメなんかでは死んだ人間が時間が経つて生き返り、生きている人を襲う、所謂「ゾンビ」なんてものは珍しくも何ともないよくある設定だ。

でも、そんな設定は、結局は映像や小説の中だけの架空のものであり、実際にゾンビが彷徨く街や世界が来るなんて、その時の俺や世界は夢にも思つてなかつただろう。

そして、世界がおかしくなつてしまつたその日……春の季節だとうのに妙に肌寒い日に、俺は目を覚ました。

「ふふつ、可愛い寝顔……」

「……おい、何してんだ」

「あ、起きた？　おはよう八一君」

薄いタオルと毛布の中から可愛らしい声が聞こえる。

朝の気怠さを更に助長する布団の中の少女を無視して、布団を出ると洗面所まで向かう。

それに続くように足音が俺の後ろまで付いてくるが無視だ無視。つたく、毎朝俺の布団に潜り込みがつて……大体俺も俺で何で気付かないんだろうな、

水を出すと、まだ冬の冷たい水が手に流れ落ちる。
お前までも俺の気持ちを下げるのか、水道管。

心の中でそう思いながらも、水を掬い顔を洗うと、少しだけだが目が覚めて来た。

一呼吸置いた俺は、後ろで綺麗な銀色の髪に一部分だけ黒色が入っている、俺がこれから通う学校の制服を着た少女に、話しかけた。

「……で、今日は何の用だ。

俺はお前に布団への不法侵入の許可を出した覚えはないぞ、【沙花

又】

「もー、いい加減クロエって呼んでよつ！

……今日は入学式でしょ？ 八一君が寝坊しないようにこうして起こしに来てあげたのに、ひどーい」

「頼んだ覚えないんだが」

沙花又クロエ。

俺と同じ16歳の女の子で、どういう訳か中学の頃一緒にクラスになつた時、何かと付き纏つて来た、自称俺の友達だ。

中学を卒業した時はやつとこいつと離れられると心底嬉しがつてた俺に、こいつは笑顔で「高校からもよろしくねつ！」って言つて来やがつた。

中学の頃はただただ学校でうざい奴という感じだったが、この数週間で誰から聞いたのか、俺の家にまで来るようになり、極め付けはこの一週間の間に妙に母さんと話し込んでくるかと思えば、一昨日の朝、目が覚めるどこいつが布団の中に潜り込んでやがつた。

曰く、抗議の為に起きてすぐ沙花又を退かし、リビングの母さんに怒鳴りつけた時の母さんから聞いた話では、「沙花又ちゃんが遅刻しないように毎朝起こしに来てくれるつて言つてくれたのよ、もうお母さん助かっちゃう！」……との事だつた。

……母さん、生まれて初めて貴方が嫌いになりました。

と、まあそんなこんなでこいつ。

沙花又クロエは俺の家に来るようになった。

因みに何で布団の中に潜り込むのか聞いた所、鈍感な俺には教えないと顔を赤らめながら言つてきた。

……危ねえ、こいつが男だつたらぶん殴つてたぜマジで。

「はあ、取り敢えず俺は着替えるから早く出てけ」

「ええー、別に沙花又は気にしないけど」

「いいから出てけ、不法侵入並びに変質者」

「酷い!?」

全く朝から騒がしい奴だ。

改めて大きな溜息を吐いた俺は、寝巻きを脱ぎ壁に掛けてある制服に手をかける。

……頼むから高校のクラスは別であってくれよ、ただでさえ何の悪戯か中学ではあいつとずっと同じクラスだつたんだからな。

周りの奴らから、「二人つて付き合つてるの?」みたいな質問をされるのはマジで金輪際ごめんだ。

「それにもこんな可愛い女の子が起こしに来てくれるなんて、うちの子は幸せねえ」

「やだもおーお義母さん//沙花又が世界一可愛いなんて//

……リビングからそんな会話が聞こえてくる。

会話を聞いた俺の中で無性に怒りが湧いてくるが、俺は我慢ができる男だ。

それにこんな所で時間を潰していると入学式に遅れかねない。

沙花又はどうせ俺の後ろに着いてくるだろうし、そうなつたら【入学式に遅れて来た男女】ということになる。

……字面だけでも寒気がしてくるのは流石だ、沙花又。

「……母さん、行ってきます」

「あら八一、朝ご飯は?」

「今日はいいや、あんまり腹減つてないし」

「そう? それならいいけど……」

母さんが心配そうな顔で俺を見つめる。

さつきの会話を聞いた事によつて生まれた怒りが一気に無くなつていく、何というか……母さんはこういう風に純粹に心配してくれる

のは変わらない。

昔からよく俺のことを気遣つてくれて、当たり前の事と母さんは言うが、そんな当たり前が子供は一番嬉しいのだ。

特に俺の場合は父親が単身赴任が多く、中々家に帰つて来ない。そんな俺からしたら、母さんは本当に大切な人なんだと心から思う。

「じゃあお義母さん、行つてきます！」

「行つてらっしゃい、この子を宜しくね沙花又ちゃん！」

「はいっ!!」

……母さん、やつぱりさつきの無しで。

家を出て、歩き始めた俺の後ろを、当然のように沙花又は着いてくる。

まあ、今更その事についてどうこう言つたりする訳じやない。

しかし……考えてみればこいつが他の奴らと遊んだり、出かけたりといったところを見た事ない気がする。

授業の合間や昼休み、放課後も毎日俺に付き纏つて來ていたこいつは、他に遊んだらする奴がいないんだろうか？
どうせ学校に着くまで暇だし、話してみるか。

「なあ、お前つて他に友達とかいないのか？」

「？ いるよ？ いつぱい」

「……？ ジゃあ何で俺とばっかり一緒にいるんだ？ 友達がいるならそいつらと遊んだりすればいいだろ」

「……」ゲシツ

「痛つ、急に何すんだよ？」

「……鈍感」

急に人の足を蹴つといてそれは無いだろ、沙花又さん。

お前は本当に女に生まれてよかつたな、グーでいってたぞ、男ならグーで。

その後は特別面白い話をするでもなく、俺と沙花叉は学校に着いた。

学校の前では俺達と同じ入学する生徒達がスマホで記念写真を撮っていた、そういうえば今年からあのウイルスのせいで親は遅れて入学式に来るんだっけか。

まあ後から来るなら変わらない気もするが、色々学校側も大変なんだろうな。

俺と沙花叉は写真を撮る生徒達を横目に校門から学校に入つて行つた。

おいおい……学校に入つたはいいが、あそこにいる奴とか凄いな、なんだあの角は？ 頭の真ん中にカラスも乗つてるし。

それに科学者みたいな奴や奇抜なサングラス掛けてるやつもいるし……あの刀持つてる奴とかまさか本物じや無いよな？ いつからここは仮装大会の会場になつたんだ。

「あつ！ いたいた、おーい！」

「げつ、お前まさか……あれと知り合いなの？」

「あれとは失礼だな、人間」

幼げを残した声が目の前から聞こえる。

声がした方を見てみると、丁度紫色のカラスと目が合つた。

あ、お辞儀した、これはどうもご丁寧に……。

「おいつ！ 吾輩はこつちだ！」

「うわっ！」

目の前の紳士的な態度のカラスさんと目で会話してると、ぐいっと下から胸倉を掴まれ、下に引き寄せられる。

見ると鼻が当たりそうな距離で小さな少女の顔がこちらを睨んでいた。

何だこいつ……俺とカラスさんの時間を邪魔しやがつて、こちとらやつと今日初めてまともなやり取りをしてたというのに。

「おい、人間。

あんまり吾輩のことを馬鹿にすると痛い目に……」

【ラプちゃん？】

「な、なんだ？ 吾輩はこの人間と話が……」

【それならそんな近づく必要ないよね？】

「で、でも……」

「い　い　か　ら　は　な　れ　て　？』

「ヒツ……ま、また後で覚えてろよ、に、人間！」

そう言い残すと、胸倉を掴んでたちびは学校の中に走り去つていつた。

……あいつ、マジで16かよ、見た目だけなら12つて言われても全然分からんな。

というか、こんなドスの効いた声出せたのか沙花叉。そこら辺のチンピラより今のお前はよっぽど怖いぞ。

「あ、待つでござる！ ラブ殿ー！」

「もう、仕方ないわね、また後でね沙花叉。隣の貴方も」

「こ、こよを置いてかないでー！」

「……何だつたんだあいつらは」

類は友を呼ぶ、昔の人は上手いことを言つた。

沙花叉の言う友達がどういう奴らなのか、これで分かつた気がする。

この非常識な奴と友達になる奴だ、少しは変でも驚かないと思つたが、まさかまともな会話も出来ないとは思わなかつた。

天晴れだ、沙花叉。

「！ だから痛えよ！ 何ださつきから！」

「浮気した八一なんてもう知らない！ 先に沙花叉行くから」

さつきより数倍強い蹴りが足に飛んできた。

こいつ女だからって何でもしていいと思うなよ……、流石に一言言おうとした俺を沙花叉は大声で怒鳴ると、鼻息荒く歩き去つてしまつた。

……決めた、もうあんな奴知らん。

というかあっちから知らないと言われたんだ、それなのに何で被害者の俺が何かしなきやいけないんだ。

あいつが謝るまでは絶対にこっちから話しかけてやるもんか。

俺はそう決意すると、痛む右足を動かし生徒達で賑わう校舎の中に入つていった。

第二話 ホームルーム

「……ふう、一先ず最悪は避けられたな」

最悪、文字通り最も悪い状況や事柄のこと。

今の俺はと/or/いうと、沙花叉と同じクラスという、史上最悪の結果を見事切り抜けられていた。

先ほど、校舎内で貰った紙を見た後、入つて来たこの1年のクラスには何処を見渡しても沙花叉の姿は無い。

それにあの沙花叉のお友達の姿もない、正に最高の状況だ。

やつと俺は付き纏う沙花叉の呪縛から解放されたのだと思うと、これからの中学校生活に胸が踊るのも無理はない。

寧ろ今からが俺の本当の学園生活の始まりと言つても過言ではない。

さて、まだ最初のホームルームまでは時間がある。

高校でぼっちを避ける為にも、ここらで誰かに話しかけておくか

そんな事を考えていた俺だつたが、ふと後ろから背中を叩かれる感覚がして後ろを振り向いた。

するとそこに居たのは……【カラス】だつた。

あ、どうも、先程ぶりですね。

「だから違ーう!! 吾輩はこっちだ!」

「げつ、お前さつきのちびか」

「ちびじやねえわ! 人間のくせに生意気だぞ!」

やはり世の中というのはそれほど甘くはないらしい。

まさか沙花叉の代わりにこいつが同じクラスだなんて……三年間沙花叉と一緒に居たことによつて培われた俺の危険センサーは、目の前の少女にレッドアラートを鳴らし続けている。

つまり、あれだ。

関わらないが吉つて事だな、うん。

「そうか、そうだな。

俺が悪かつた、じゃあそういう事で

「お、おい！ どこ行くんだ？ まだ話は終わつてないぞ！」

「はいはい、じゃあそういう事で」

「どういう事だ!?」

席を立ち上がり、離れる俺の後ろから煩い声が聞こえてくるが、こういうのは気にしたら負けだ。

それよりも、早いとこ普通の友達を見つけよう。

沙花叉のように人の話を聞かない奴や、あのちびのよう人にいちゃもん付けるような奴じやない、ごく普通の友達を。

クラスにいるとどうしてもあのちびが五月蠅かつた為、俺はクラスを出るとぶらぶらと廊下を歩く事にした。

後10分か20分もすればホールームだが、一先ずあのクラスからは離れたかつたし、それにこの学校の何処に何があるのかというのも知る事ができる良い機会だ。

そうして自分のクラスから少しの間歩いていると、俺と同じように廊下を歩く生徒達の中に、一際目立つ【木刀】が見えた。

腰に付いてる木刀から目を離し、よく見ると何処かで見たような見てないような女の子が居た。

しかしあんなものぶら下げてよく先生達は何も言わないな、見てくればまるで昭和のヤンキーだぞ。

そして髪は金色だろうか？ それに綺麗な水色のような色の目をしている。

どう考へても日本人離れした目鼻立ちと髪の色、そして腰に差している木刀。

この状況で大抵の人は俺と同じ言葉を溢すだろう。

「なんじやあれ」

「なつ!? あれとは何でござるか、切るでござるよ！」

「え？ ああ悪い、つい」

どうやら聞こえてしまつたらしい。

ああやだ、こつち来るよ……俺は普通の友達を探しに来たつていうのに、どうしてこう変わり者しか見つからないんだこの学校は。

「ん？ その顔……もしかして八一君でござるか？」

「？ どうして俺の名前を？」

「どうしても何も、沙花叉から散々聞いてたでござる。

それにさつき校門で会つたでござるよ」

「校門……あ、もしかしてあの時の刀持つてた人？」

「刀じゃなくて、チャキ丸でござる！」

なんだその小学生が付けたみたいな名前は。

つていうかこいつあの沙花叉と愉快な仲間達の一人かよ、どおりで何か見たことがあつたような気がした訳だ。

それにして俺は友達を探してこうして廊下にいる訳だが、普通は自分のクラスにいる筈。

それなのにこいつはここで何をしてるんだ？

「でも丁度良かつたでござる、八一君に会えて」

「？ 僕に？ それはどういう……」

「それは着いてからのお楽しみでござるな、取り敢えず一緒に来て欲しいでござる」

「まあ……別に良いけど、もうホームルームまであまり時間がないぞ？」

「大丈夫でござる、すぐ済む用事だから」

そう言い残すとこいつ……いや、いつまでもこいつやあいつ呼ばわりじや失礼か。

この子は意外とまともそうだし、それに仲良くする気は無いが、沙花叉の友達なら名前ぐらいは知つておいてもいいかもしない。

あのちびは論外だが、あいつの頭に乗つてるカラスさんの名前は是非とも後で聞いておこう。

「なあ、その前に名前を教えてくれないか？」

「え？ あ、そうでござるな、失礼したでござる。」

風真いろはでござる！ これから宜しくでござる、八一君！」

「ああ、風真」

「もおー、いろはでいいでござるよつ！」

「そうか……？」

何だこの感じ……何なんだろうこの感じは。

この沙花叉と話してゐる時には感じない幸福感は。

これだよこれ、聞いてるか沙花叉、これがお前に足りないものだぞ。こんなに性格良きそうな友達がいるのに、何故お前はあんなにもうざ絡みするような奴になつてしまつたんだ、色々チャンスはあつた筈だろ？

それがどうして人の足を蹴り上げる奴になつてしまつたんだ、俺は悲しいぜ。

「じゃあ行くでござるよ、八一君！」

「ああ、分かつた、いろは」

いろはは満足したように笑うと俺の前を歩き出した。

そうして歩いてる間に色々と話をした所、どうやらいろはは小さい頃から剣道を父親の影響で習つていたらしく、その腕前はかなりのものらしい。

中学では全国大会で一位も取つていて、高校生や大人相手でも歯が立たないらしく、剣道の世界ではかなりの有名人なんだそうだ。

その事もあってか特例中の特例で中学の時や、この高校でも決して人を傷つけないのを条件に、木刀を持つことが許されているらしい。どうやら腰に刀を刺していないと落ち着かないんだそうだ、いや侍かよ。

「そう！ 風真是侍なんでござる！」

よく分かつてるようで嬉しいでござるよ、八一君

「もしかしてその喋り方も侍の真似か？」

「真似じやなくて本物でござるつ！」

本物の侍が本当に語尾にござるつて言つてたのかは、甚だ疑問が残るが、そんなことこの自称サムライには関係ないんだろうな。

「本物の侍なら本物の刀を刺さなきやダメだろ」

「……」

「……？　いろは？」

何気なく、本当に何気なく言つた俺の言葉に、突然いろはの足が止まる。

勿論本気で本物の、いわゆる日本刀を持ってと言つたわけじや無い、侍だと豪語するいろはを少しからかいたくて言つただけだ。

それなのにいろはは突然青ざめた顔をしてその場に立ち止まつた。

急にどうしたんだ、と聞く俺にいろはは何も答えなかつた。

いや、正しくは答えたくないよう見えた、何か思い出したくないトラウマを隠すように。

それが何なのかは分からぬが、直ぐに調子を取り戻し笑いながら歩き出すいろはの後を、俺はただ着いていくしかなかつた。

いつかいろはが話してくれる日は来るのかと、そんな事を考えながら。

第三話 違和感

そうして若干俺の質問のせいで気まずくなつたが、運良く目的地はそんなに遠くはなく、いろはに着いていくままに歩いて来た俺はある教室の前に来ていた。

しかし中から生徒の声が聞こえてくるわけでもなく、よく見ると教室の看板に何も書かれていないことから、ここは空き教室のようだ。こんな所に何の用があるのかは分からぬが、取り敢えずそろそろホームルームも始まるし、ぱぱっと済まして自分の教室に帰るとしよう。

……いや、やつぱりあんま帰りたくないかもな。

これから一年あのちびと同じクラスかと思うと、流石に気が滅入る。

クラス変更とか出来たりするのか？ もし出来るならお願ひしたい。

「連れて來たでござるよー」

「ご苦労様、いろは

「へー、この人が八一君？」

先に教室に入つたいろはに、続いた俺に一人の女子が詰め寄つて來た。

流石に沙花叉の愉快な仲間達の一人のいろはが連れて來たこの場所に、居るこの二人の女子に見当が付かない俺じやない。

ジロジロと顔や体を見てくる目の前のこいちは、確か校門で科学者のような白衣を制服の上から着ていた奴だ。

そして隣にいる背の高いこいちは、変なダサいサングラスを掛けていた奴だつたか？

やつたな、これでコンプリートだぜクソが。

ジロジロと見てくる奴を無視して、教室にある椅子に腰を掛ける。教室の中を見渡す限り、少し古めの椅子や机、それに窓ガラスもあまり掃除されてるふうには見えない。

察するにここは昔使われていた教室といった所だろう。

それか問題児専用の教室だつたりするのか？ 正直言うとコイツらがいる時点でそつちの可能性の方が俺の中では優勢だ。

「ねえねえ、こよの事覚えてる？？」

「……それで何の用なんだ？ こんな所にまで連れて来たのは」

「無視つ！ ねえ～ねえ～！」

急に抱き着いてくるな、暑苦しい。

殆ど初対面の俺に馴れ馴れしそぎないか、この人。

それに沙花叉と同じで無駄な肉が顔に当たつて鬱陶しい。

「そうだね……簡単に言えば、沙花叉の事かな」

背の高い奴は俺の前に座ると腕を組み、話し始めた。

顔から察するに、少なくとも俺が嬉しくなるようなことではないだろう。

「……あいつがどうかしたのか」

「どうも何も、私達三人は沙花叉と同じクラスだつたんだけど……あの子が見た事ないくらい怒つてるから、貴方が何かしたんだじやないかと思つてね」

ほら見ろ、全く嬉しくない話だ。

大体俺は沙花叉の保護者でもなければ、ご機嫌取りをする役割でもない。

あいつが勝手に怒つて、俺を蹴り上げたくせに、それは俺のせいだと言いたいのか？ なんて理不尽な奴だ、締め上げてやりたい。

「俺はあいつの保護者じやない、あいつが勝手に怒つてる事を俺のせいにされても困る」

「そとは言つても沙花叉は何も話そうとしないし……私達じやどうにも出来そうにないの。

貴方だつてあの子があんな調子で入学式を迎えるのは、望んでないでしょ？」

「知らん、勝手にすればいい」

「うわー、八一君ばっさりでござるなあ」

「いろはちゃんがそれ言う？」

全く本当に面倒な奴だ、自分勝手で我儘なあいつに何で俺がどうこうしないといけない。

……まあ、俺もあいつが嬉しそうに高校生活を語る姿を何度も見ているし、少しだけ、ほんの少しだけ心が揺れ動かない事もないが、それでもあいつももう子供じやない。

いつまでも俺みたいにつまらない奴と一緒に居るんじやなくて、こいつらや他の連中みたいに馬が合う奴と、楽しくやれば良い。

それがあいつにとつても、俺にとつても一番マシな選択だと思う。目の前の背の高い奴……名前を聞くと【鷹嶺ルイ】と言うらしい。鷹嶺ルイと科学者みたいな格好の【博衣こより】の二人に俺はそう伝えた。

それが本当に俺は正しいとこの時は思っていた。

……この時だけだが。

「……分かつた、はあ、沙花又が更に怒るわね」

「悪いが、俺はそうする」

「時間を取りさせてごめんなさい、もう用事は済んだから戻つて良いわよ」

「ああ、それじゃ」

残念そうな顔で俺を見る鷹嶺に少しだけ罪悪感を感じながらも、俺

は空き教室から廊下に出て、元来た廊下を歩き出す。

博衣と風真は何を言うべきか分かつてないような顔だつた。

あの三人が沙花又から俺との関係をどう聞いてるのかは知らないが、俺と沙花又はただ中学で3年間同じクラスメイトであつただけだ。

あいつが俺をどう思つてるかは知らないが、少なくとも俺は……
さつきまで生徒で賑わっていた廊下も、流石にホームルームが近く

なり、各々の教室に戻つていったと分かる静かさの中。

俺の耳は何故か廊下の端にいた二人の女子生徒の会話を聞いていた。

「ねえ……これやばくなーい？ 殺人事件だつて」

「うつわ、何それやば……数十人死んでるつて書いてあるじゃん」

「しかもこれ結構近くない？ まだ犯人も捕まつてないみたいだし」

「まあどうせ警察が何とかするでしょ、それよりさー、帰りにマック行かない？」

「いいねそれ！ いくいく！」

……？ 数十人が死んでる殺人事件？

それがデマやフェイクじやないのなら、流石にヤバくないか？ この日本でそんな人が死ぬ事件なんて滅多に起きないぞ。

女子生徒の会話の内容に、妙な胸騒ぎを感じた俺は、ポケットにある自分のスマホを取り出すと、ニュースアプリを開き今日のニュース情報を片っ端から見ていった。

すると、確かにこの学校の近所の路地や公園などで人が死んでいるというニュースがあり、だが被害者は推定10人程だと書いてあつた。

……なんだ、驚かせやがつて。

10人死んでるのも結構ヤバい気はするが、この程度なら警察も問題なく犯人を捕まえられるだろう。

何せ、その犯人の特徴は……

【まるでゾンビみたいに歩き回る男】 のだから。

「どうせ、アル中のおっさんがとち狂つてるだけだろ」

数十人が死んでるなんてどんな事件かと思つて見てみれば、所詮現実なんてこんなもんだ。

フィクションや漫画、アニメやゲームみたいな事が本当に起ころわけがない。

それに10人が死んだと言つてもどうやらその死体すら見つかっては居ないらしい、ニュースには血溜まりや鞄などが多数見つかることから、被害者の数を予測していると書いてあつた。

期待外れにも似ている感情から俺は直ぐにスマホをポケットに仕舞い込んだ。

そうこうしている内に、ホームルームのチャイムがスピーカーから聞こえて来た。

ヤバい、予想以上にあいつらに時間を取られてた。
廊下をダッシュで走り自分の教室にまで戻つて来た俺だが、案の定教室に居た担任に叱られ、入学早々遅刻魔のレッテルを貼られてしまつた。

俺のせいじやねえのに、クソつ。

「なあ、お前急に出て行つて何してたんだ？」
「あ？ 強いて言えば、お前のお仲間の所だ」
「えつ、そんなの吾輩聞いてないぞ！」
「そこ！ 先生がこれから話すので静かにしなさい！」
「は、はいすみません……」
「……はあ」

周りの奴らは今担任に怒られてしゅんとなつてるちびと俺が、友達みたいな目線で見て来やがる。

これじやあ中学の頃、沙花叉と出会つた時と全く同じじやないか。
高校こそは俺は普通の友達を作ろうと思つていたのに、入学早々こんな目に遭うなんて……。

しかし、今思うと
この瞬間に俺が気付き動いていれば
本当に最悪の事態は防げていたのかも知れない

第四話 何かがおかしい

「それでは、今からホームルームを始めます」

担任の川島先生が教団の前に立ち、ホームルームを始めた。

とは言つても入学初日という事で、この後入学式をやつた後は、午前中に帰つてもいいらしい。

教科書やその他諸々の学校生活に必要な物は明日配られるそうだ。そうして短めのホームルームを終えた川島先生は、入学式が始まつたら呼びに来ると言い残すと、教室から色々な書類を持つて出て行った。

きつとこの後担任同士で打ち合わせやら何やらをやるんだろう、教員という職業も中々辛いもんだな。

そういうえば、ホームルームの最中に学校の外でやたらサイレンが鳴つていたな。

今も何台ものパトカーがサイレンを鳴らしているんだろう、外は朝の静かさと打つて変わつて、少し騒がしい程に音が鳴り止まない。……何か胸騒ぎがする、いや単純に初の高校生活に多少なりとも緊張しているだけか？

「おい、人間！　お前のせいで先生に怒られたじやないか！　つたくこれだから男は……」

「さつきから思つてたんだが、その人間とか吾輩とかの変な口調は何だ？　高校生にもなつて恥ずかしいにも程があるぞ」

「な!?　おおおお前にそんな事言われる筋合は無いぞ！」

「まあ、それはそうだが」

次から次へと表情筋が飽きないやつだ。

さて、川島先生はそう言つたものの入学式がいつ始まるかも分からぬ。

その間、ただ机でボーッとしてるのも面白くないな。

かと言つて、誰か話す相手がいる訳でもないし、周りはすでに何個かグループが既に出来上がりつつある。

というか、このままでは俺だけぼっちになる気がする。

これはまずい、どうにかして話し相手ぐらいは見つけないと、俺の高校生活は期待していた青色から一転して、灰色の空模様一直線だ。

「おい、人間」

「あ？ 何だよ、今お前に構つてる暇は……」

そう言いながら、後ろを振り返ると、ちびすけは窓の方を向き何か説明し難い顔をしていた。

その光景がやけに気になり、ちびと同じ目線を辿つていくと、そこには警察のパトカーが何台も止まっていた。

それも警察はパトカーを道路の真ん中に壁を作るよう駐車していく、まるでそこで銃撃戦でも繰り広げる気なのかと疑うくらい、拳銃を取り出し駐車したパトカーから、先の道路を見つめていた。

その光景は嫌な曇り空も相まって、余計に不気味な光景だつた。

警察は一体何故あんな事をしてるんだ？

もしかしてさつきの殺人犯を捕まえようと……？ いやそれにしてもやや警察の数が多くすぎる。

それにいくら何でもアメリカならまだしも、日本であそこまで犯人に対して警戒するだろうか。

相手がライフルを持つているなら話は別だが、それなら無闇に大勢の警察が駆けつけることはしないだろう、先に近隣住民の保護と安全を優先する筈だ。

それとも、まさか……人の命より優先しなければいけない事があるのか？

「！ おい、何処に行くちびすけ」

「離せ、人間、少し……様子を見てくるだけだ」

俺が窓の外に夢中になつてている時、ふと横にちびすけもカラスさんもいないことに気付いた。

そして教室の扉の方を見ると、ちびすけが階段の方へ降りしていくのが目に入る。

何となく何を考えているのか理解できた俺は、ちびすけに急いで走つて追いつくと、手を掴み行かせないようにする。

様子を見に行くだと？ この状況で外に行くバカは本当のバカだ。あれだけの警察が必要な何かしらがあの先で起こっているのに、バ力正直に向かつて行つてもしもの事があつたらどうする。

俺は正直知つたこつちやないが、こいつは沙花叉の友達だ、後でありますに怒鳴られるのは勘弁したい。

「状況を分かつてるのか、あの警察の数を見たろ、お前死ぬぞ」「……刮目せよ！ 吾輩の名はラプラス・ダークネスだ！」

「……は？」

急に何言つてんだこいつ、遂にイかれただ。

「吾輩はエデンの星を總べる者！ そんな吾輩に恐れるものなんてないのだ！ それじやあそういう事で手を離してもらって……」

「いや、余計に離せるか」

どうやら沙花叉はどんでもない厨二病こじらせ少女と交友関係を築いていたらしい。

ラプラス・ダークネス？ 最早ほぼ初対面の俺にここまで厨二病の設定を貫かれると、逆に清々しく思えてくるな。

とはいえ、それなら余計に行かせるわけにはいかない。

罷り間違つて警察の隣でハリー・ポッターの呪文とか唱えてみる、明日のニュースでコイツの厨二設定が全国に名を轟かせる事になつてしまふ。

それだけは阻止しなければ、この痛々しい厨二少女の為にも。

「面白半分で行く気なら早く教室に戻れ、俺は本気だぞ」

本名がわからぬから仕方なくラプラスつて呼ぶが、ラプラスは俺がそう言うと、ポケットから携帯を取り出し俺に見せて来た。

そこには母上と書かれたスマホの電話画面が表示されているが、繫がつてているにも関わらずスマホからは何の音も聞こえない。つまり、相手がスマホの電話に出ないという事だろう。

「母上はいつでも吾輩を気にかけてくれて、電話にも直ぐに出てくれるんだ……それなのに、さつきから……電話に出なくて……」

「……」

「お願ひだ、離してくれ……八一」

……こいつ、こういう時に限つて名前で呼びやがつて。

「……分かつた、お前が行きたきや行けばいい」

そう言つて、離すまいと握つていた手を離す。

ラプラスは少し赤くなつた手首を触ると、ジトつとした目を向けて來た。

……こいつ、人が心配してやつてやつた事なのに何だその目は。
「悪かつたよ、強く握り過ぎた、それより早く行くぞ」

「え、な、どういう……ちよ、ちよつと!?　おい！」

先に階段を降りて行く俺に続いてラプラスも駆け足で階段を降りる。

階段を降りている間、ラプラスは俺に色々一人で平氣だの、俺には関係ないだのと言つてきたが、最終的には何やら納得した様子で口を閉じた。

そりやあそуд、この状況で高校生……まあ年齢は高校生の、女子が一人外に飛び出して、どうにか出来る訳がない。

こいつは少し感情的に行動する所があるが、どうやら自分で物事を考えられる頭はあるみたいだな。

俺が階段を降りている間、一言も話さなかつたのも状況を理解するのに良いスペースになつただろう、どうやら俺は沙花又によると、黙つてると相当怖い顔をしているらしいからな。

全く心外だ、こんなにも慈愛に満ちた性格の俺にそんな事言いやがつて、男だつたらコンクリート詰めにしてたぜ。

「八一……やっぱり良いやつなんだな」

「あ？　どういう意味だ」

「え？　あ、その……沙花又からは、鈍感で女心の分からぬ唐変木つて聞いてたから……」

「そうか、ありがとう教えてくれて」

「や、八一……？　か、顔が怖いぞー……？」

大丈夫だラプラス、生まれつきこの顔だ。

少し頭の血管が切れそうだが、今はそれどころじゃない。

今の話は後で沙花叉にしつかり自重聴取してやろう、楽しみだ。さて、案外すんなりと階段から校門まで辿り着いた俺達は、ラプラスの方角に向かって歩き出した。

しかし、やはり町の雰囲気がどこか不気味だ。

沙花叉と一緒に歩いていた朝には聞こえていた人の歩いている音や、車の音、店の中の話し声も、何故か今はぴたりと止んで聞こえて来ない。

まるで世界に俺とラプラスしか居なくなつたみたいに静かだ。

それが異様なのはラプラスも感じているようで、さつきから俺の横にピッタリとくつついて来て歩きにくい。

つていうか俺が付いてきたからいいものの、もし俺が付いてこなかつたら、こいつはどうやつて家まで行く気だつたんだ？

今俺は迷子の子どもを保護してる大人の気分だぜ。

「少しば自分の体くらい自分で支えてくれないか？」

「う、うるさいぞ……！」 吾輩だつてしたくてしてゐわけじゃ

「あつそ、なら俺はここまでだな」

「い、いやー？ それは少し違うんじゃないかなつてわ、吾輩は思うけどなー？」

はあ、高校の入学式の日に抜け出すというリスクを犯してやる事が、こいつのお守りとは。

全くどいつもこいつもイカれてるぜ。

その時、一発の銃声が俺とラプラスの耳を激しく裂いて遠ざかつていつた。

そして間髪入れずにあるで戦場のど真ん中にいるみたいに、俺とラプラスがいる道路より先、右に曲がった道から、銃声が止まる事なく鳴り響く。

そしてそんな爆音の中に、人間の悲鳴が混ざつてゐるのを俺は聞き逃さなかつた。

「ラプラス！ こつちだ、早く！」

「え、な、銃声……？　八一、一体何が……」

「考えるのは後だ、一先ずここを離れるぞ！」

ラプラスの手を掴んで俺は走り出した。

その手は小さく暖かくて、俺の心の内に、こいつを絶対に守るという決意を抱かせるには充分過ぎるほど、尊い感触だった。

……何処でもいい、兎に角ここを離れないとまずい。

あれだけの銃声が聞こえたということは、きっと警察はとんでもないものに向かつて、銃を発砲していた。

人間相手にあそこまでする訳がない、でもだとしたら何だ？　何故警察はあんな死に物狂いみたいに……？

それに銃声の中で微かに悲鳴も聞こえた、さつきまであんなに静かだつたんだぞ、なのに何だつて急に銃声が鳴り響くんだよ！　クソッ！

「取り敢えず、学校に戻るぞ、いいな？」

「で、でも八一、吾輩のお母さんが……」

「大丈夫だ、兎に角今はそう信じろ」

幸いにも、銃声がした方角と俺達が向かつていたラプラスの方角は違う。

だからといって安心は出来ないが、少なくともラプラスにとつては気休め程度にはなるだろう。

そうして俺達は学校に戻る為に走っていた。

動搖から非日常的な出来事からラプラスは走るにも一苦労だったが、何とか俺が手を引き学校が目前に見える距離まで近づいていた。

嫌な予感がする、どうしてさつきまであれだけの銃声が鳴ったにも関わらず、野次馬の一人も見かけないんだ？

それに遠くではまだ銃声が聞こえるが、その数は明らかにさつきより少ない。

一体何に対してもそんなに発砲しているんだ？　……妙な胸騒ぎがする……

その時、遠くで人影のようなものが見えた。

その人影はまるで酔っ払いのように右へ左へ揺れながら、俺たちの方へ歩いて来ていた。

その人影を目にしたラプラスは安堵したのか、俺の手を握る力を抜いて深く溜息を吐いた。

「はあああ、良かつたなハ一、人だぞ人」

「……ラプラス」

「一時は吾輩もどうなる事かと……」

「ラプラス」

「ん？ ……ハ一？ どうし」

「逃げるぞ……早く……早く!!」

ラプラスの手を引いて、人影と逆方向に再び走り出す。

訳が分からぬ様子でラプラスは俺に説明しろと叫ぶが、今はそんな事に構つてられない。

俺もとてこの世の事とは信じられない……しかし、自慢じやないが俺は唯一目の良さだけは誰にも負けた事はない。

子供の頃から大人によく褒められ続け、今では視力検査で間違えることなんて万が一にも無い程、俺の目は遠くの物も鮮明に写つてしまう。

そんな俺はしつかりとこの目で見てしまった……

あれが肉を噛みちぎり、口から血を滴らせながら、俺とラプラスを人とは思えない血走った目玉で見つめているのを。

第五話 Time Is Coming

恐怖が全身を駆け巡る。

何なんだ、一体何なんだあいつは!?

さつきの警察はあいつに向かつて銃を撃っていたのか？　いや、それにしては何もかもが不自然だ。

聞こえた銃声の数は余りにも過剰すぎる、となると……あいつのようないい存在が複数いたという事か？

……いや今はそんな事取り敢えず後だ、一先ずは何処か安全な場所まで、他の事はそのあと考えたら良い。

学校まで辿り着けなかつたのは最悪だつた。

あそこには沙花又がいる、それに風真も鷹嶺も博衣もあそこにはいる、学校には先生達がいるし校門を閉める事だつて出来る。

だから大丈夫だとは思うが……あいつが学校の側にという事は銃を持つた大勢の警官が、敵わなかつたということだろう。

くそつ、少しは体力をつけておくんだつた……恐怖心と焦りからどうにも心臓の鼓動が早い。

足も徐々に痛みが増し、息も喋る暇がない程上がつてきた。

それに、見ると隣で走るラプラスの方が俺より辛そうだ、流石にちびすけにはこんな状況で普通に走れつていう方が無理だろう。

すると、遠くの方で何かの音が聞こえた。

その方角はどうやら学校からのようで、2、3分は走つているラプラスと俺の位置からでも、かなりの大音量でスピーカーから少しのノイズが聞こえた後、中年の男の声が町中に響き渡つた。

「えー、現在正体不明の暴徒化した集団が、町にて破壊活動及び傷害行動を行つています。

近隣住民の方々は決して外には出ず、我々警察が事態を鎮静化する

まで落ち着いて、家の中に居ますよう願います」

「はあ、はあ、ラプラス……一旦止まるぞ……」

住宅街のコンクリートの壁を背にラプラスと共に尻もちを着いた。俺は何とかまだ走れるが、ラプラスは喋るのも出来ないほど小刻みに呼吸を繰り返し、顔は上気し赤くなっている。

……何かこの状況で警察に出会つたら、別の理由で俺逮捕されそうだな。

まあ、そんな冗談は兎も角、ラプラスはかなり辛そうだ。

丁度近くに自販機があるしスポーツドリンクでも買つてきた方がいいだろう。

どうやら学校の側で出くわしたあいつは見た所、追つて来てないみたいだが、まだあいつと同じような奴が必ず居るはずだ。

あまり不用意に彷徨きたくはないが、仕方ない。

「おいラプラス、俺は飲み物を買つてくる、すぐ戻つてくるからここで待つてろ」

「え……い、いやだ！ 吾輩一人じゃ無理だ、八一も一緒にいてくれ……」

「はあ、すぐ戻るつて言つただろ」

「お、お願ひだ……吾輩をひとりにしないで……」

……こいつはどうやら相当参つているらしい。

無理もないか、男の俺でも遠目に見ただけで全身の毛が逆立つような恐怖を感じた。

きつと女のこいつじや余計に怖かっただろう、本当にこいつよくあの時一人で行こうとしてたな。

エデンの星を總べるラプラス・ダークネスさんは、怖いもの無しじやなかつたのか？ 今のお前は見た目相応の女の子にしか見えないぞ。

「じゃあ一緒に來い、もう歩けるだろ」

「う、うん……ありがとう八一」

座つているラプラスの前に手を出すと、ラプラスは少し恥ずかしげ

に俺の手を握ると、勢いよく立ち上がった。

さつきまで痛いぐらい手を握つてたのに、何を今更照れてるんだこいつ、ていうかどんだけ手熱いんだよ。

ラプラスの手は風邪なんじやないかと思うほど熱く手汗で湿つていた、子供の体温は高いらしいけど、こいつ本当に12歳とかじやないよな……？

「……あー、その大丈夫か？」

「わ、吾輩は大丈夫だ、ただ……あいつらは大丈夫かな……？」 八一

……」

「きつとな、きつと大丈夫だ」

そう、きつとあいつらは心配いらない。

学校には今、警察だつてているだろう。

だから心配なんて要らない、俺は自分の胸にそういう何度も何度も聞かせながら、ラプラスと共に自販機まで歩いていった。

町は依然として静寂が辺りを支配している。

ガコンという音と共に落ちて来るスポーツドリンクを取り、勢いよく飲み干しながら、もしかしてあの化け物はもう居なくなつたのだろうかと、そんな事を楽観的に考えていた。

隣のラプラスは水を飲んで少しは落ち着いたのか、さつきの怯えた表情は少し和らぎ、何かを真剣に考えているような顔をしていた。

大方、学校に戻る事を考えているのだろう、まあどれだけ口で言つても不安は消えないか。

それでもこの状況で学校まで行くのは危険極まりないだろう、兎にも角にも今は何处かに身を隠すべきだ。

「……ん？ 誰だこんな時に……」

何処に身を隠そーか考え悩んでいた俺のポケットから、スマホが着信音を振動と共に鳴らした。

不思議に思いながらもポケットからスマホを手に取り画面を見ると、そこにはただ一言「母さん」と書かれた文字が表示されていた。

その瞬間、俺の脳裏に過ぎつたのはとてもじゃないが考えたくもない事だ。

こんな状況で電話をかけて来る母さんの身に何かあつたのか、それともこの状況で空き巣にでもあつたのか、それともあの化け物に……襲われているのか。

しかし、その不安は電話に出た母さんの声色からさらに加速する事になった。

「や、八一!? 今何処にいるの!?

「母さん? どうし……」

「ああ良かつた! 無事なのね八一!? 今、学校に居るの?」

「……うん、学校に居るよ」

そう言つた時、隣のラプラスから驚いた様な視線を感じる。

まあ確かにラプラスからは会話が聞こえないから、何故俺がこんな嘘を付いているのか、訳が分からぬのも無理はない。

ただ今の母さんは事情は分からぬが少しパニックを起こしているのは、電話越しでも伝わる、ここで下手に不安にさせる事を言つて家から出られたら敵わない。

うちの母さんはマジでやりそだからさうに敵わん。

「いい? 八一、今から母さんが言う事をちゃんと聞いてね?」

「うん、分かつた」

それから母さんはとてもにわかには信じられないが、今起こつて現実について話し始めた。

今から丁度半年前、アメリカ、ロシア、中国、ドイツ、オーストラリア、イギリス、日本を除く他の主要な国で不特定多数の人間が毒ガステロにあつたらしい。

しかしそのテロで奇妙にも死人は一人も出なかつた、勿論毒ガスを吸い込んだ筈の人達も、だ。

その毒ガスを調べた警察も人有毒な成分は入つていなかつたと、後日発表したらしい。

それから驚くべき速さで各国のテロを起こした犯人は全員捕まり、当然全員有罪判決の後、刑務所に入る事になつた。

数日もしないうちに犯人は全員捕まつたみたいだが、それは犯人にはある特徴があつたかららしい。

その特徴は腕や足に、[Time Is Coming] というタトゥーが無数に入っていた事と、犯人達が終末論の熱狂的な信者だった事だそうだ。

まあ何はともあれ犯人は全員捕まり被害もほぼ無し、それ程大きなニュースにはならなかつた、俺も今の今まで、そんなニュースもあつたな、と忘れていたくらいだ。

しかし、それから半年が経つた今日……突如刑務所の囚人や看守がもがき苦しみ出したらしい。

そして異常を察知し駆けつけた複数の警官に、よろよろと歩きながら近づいた一人の囚人が、突然警官の首に噛み付いた。

当然他の警官は囚人に銃を発砲するが、信じられない事に囚人は何発もの弾を体に喰らいながら尚、警官の首の肉を噛みちぎりながら貪つていた。

その直後、何百人の同じような姿の囚人や看守が刑務所から飛び出してきた、その光景を最後に俺の見ていた某SNSの動画は終わつた。

そして見ていた動画に写つていた囚人や看守達は、さつき俺が見た奴と同じように、動画を撮つているであろう人をまるで飢えた獣の様に睨み付けていた。

そしてこの動画の様に、人が人を襲つているというのは今、全世界で同時多発的に起こつていてる事らしく、日本でもこの町だけでなく、様々な場所でそれは起こつているらしい。

それが母さんが電話越しに俺に伝えた事だつた。

「今、警察の人が学校に居るのよね？ 八一、とにかく今は学校にて、母さんも落ち着いたら学校に行くから、それまで絶対に外に出ちゃダメ」

「……母さん」

「？ どうしたの？ ……八一？」

「ああ、まずい。

「ごめんなさい、俺は親不孝の息子だよ」

今ほど自分の事を殴りたいと思つた事はない、今ほどさつき学校を

離れたという事を後悔しないだろう。

今ほど……母さんに会いたくて堪らない事なんてないぜ、畜生っ!!

「八一？ や」 ブチッ

勢いよくスマホの画面を指で叩きつけ、電話を切った俺はラプラスに急いで学校に戻ると伝える。

それを聞いたラプラスが深く頷くのを見ると、俺は全力で疲れた足を動かし学校へ走り出した。

警察なんて意味がない、動画に写つてたのは刑務所だ。

人が逃げ出さないように作られた建物だ、それを奴らはいつも容易く抜け出していた。

それに学校なんて安全じゃない、生徒や先生の中にあいつらに変わった奴が居るかもしれない。

「沙花又……くそつ！ 間に合つてくれ!!!」

第六話、崩壊

静かな町を全速力で走り抜けてく。

大丈夫、きっと間に合う筈だ、さつき学校から聞こえたスピーカーからもおかしな雰囲気は無かつた。

今頃、沙花又はどうせ暇そうに机に突つ伏してゐるだろう、綺麗な目で時計を睨みながら、進まない時計の針にがっかりしてゐる筈だ。きつとそうに違いない……なあそだろ？ 沙花又……

「ハー！ あそこ！」

隣で息を切らせながら走るラプラスが、前の方を指差しながら叫ぶ。

その指の先には俺たちが目指す、沙花又達がいるであろう学校が遠くに見えた。

あの怪物から逃げてる時は遠く感じた距離だったが、やはり人は目的があると違うらしい、俺とラプラスは少しだけ立ち止まり、遠目に学校を見つめると、また体の疲れを無視して走り始めた。

「ラプラス！ もう少しだ踏ん張れ！」

「わ、吾輩を舐めるなあ！」

そうして走つて走つて、俺たちは学校の手前まで來ていた。

そこで俺は気づいてしまつた。

……もう全てが遅かつたということに。

学校に繋がる道を走り、最後の曲がり角を曲がつた俺とラプラスの目に飛び込んできた光景は、学校の門の前で警官の服を着た男が、さつき出くわした数人の怪物に、見るも無惨に喰われてる姿だつた。

一人は腕を食いちぎつて、二の腕に噛み付いていて、また一人は腹から内臓を引き摺り出し、夥しい量の血が噴き出すそれを無我夢中で喰らつっていた。

そして俺たち目の前で警官を食つてゐる怪物の一人は、この学校の

制服を着ていて、その事実が俺を更に絶望へと突き落とした。

「あ……ああ……嘘だ、ろ？…………こんなの……」

目の前の光景がまるで理解出来ない。

なんでこんな事が俺の目の前で起きてるんだ？ ついさっきまで普通に通行人が歩いていた道で、何で人が人を食つて……。

希望が目の前の光景にズタズタに引き裂かれていく。

どうせ警察が何とかしてる、きっと戻れば全てが片付いていてこんな状況で外に出た俺を、沙花叉や母さんが叱つてくる。

そして……その後は俺は謝つて仲直りして……また明日にはこの学校に何事もなかつたように……沙花叉と、笑つて……。

「!! さ、沙花叉！」

そうだ、沙花叉……あいつはどうなつたんだ!?

いや、きっと大丈夫だ。

何だかんだ地頭は良いあいつの事だ、きっとすぐに状況を察知して逃げてるに決まってる。

目の前の警官は、恐らく沙花叉が逃げる時間稼ぎでここに残つてくれたんだろう。

それなら早く助けに行かないと……!

「……っ！ 何掴んでんだよ……離せラプラス!!」

目の前の怪物を無視して走り出そうとする俺だったが、後ろから何かに強く腕を掴まれる。

見ると、そこには俺の腕を離しまいと必死に小さな体に力を入れ、俺の腕に抱き着くラプラスがいた。

「行かせ……ないぞ！ 絶対につ!! 行かせない！」

「お前、ふざけんなよ！ 元はと言えばお前について行つたばかりに俺は！」

「今、八一が行つて何になるんだ!? もう手遅れだ……全部手遅れなんだつ……」

ラプラスの目から大粒の涙がポツリと零れ落ちる。

それは沙花叉達が死んだと決めつけ、その死に対する涙だつたのか、俺を外に連れてきてしまつたことに対する後悔の涙だつたのか

は、俺には分からなかつた。

ただ、俺は……ラプラスの様に諦めたりはしない、沙花又は生きている。

絶対に生き残つて いる筈だ。

「もう一度だけ言う、離せ」

「うぐつ……ひつぐ……いや……いやだ！」

「……っ！ そうかよ!!」

ラプラスは絶対に行かせないと言う言葉通り、力一杯俺を止めようとしていた。

しかし、所詮は男と女、それにラプラスは体格的にもかなり小柄だ、力勝負なら圧倒的に俺の方が有利。

そうして俺はラプラスを力尽くで引き剥がし、怪物のある方へと走つて行つた。

「うつああ……なん……でよ、八一……！ 何で、行つちやう……の……つ……！」

後ろからラプラスの嗚咽混じりに俺を呼ぶ声が聞こえる。

その声に俺の心は大きく揺さぶられるが、それでも俺はやはりいつも放つておくわけには行かない。

……本当に前は居ても居なくとも俺を困らせる奴だぜ、沙花又。

「つ邪魔なんだよ、退け！」

俺が走り出すと、警官に群がつていた怪物の一人が俺に向かつてきた。

しかしその動きは人間より遙かに遅く、しかもこちらに千鳥足で向かってくるだけで、何か喧嘩の様に殴つたり蹴つたりするような素振りすらない。

……多分本当にこの怪物はゾンビの様なものなんだろう、それなら弱点もきつと同じな筈だ。

俺は学校の側に転がつていた拳程の石を拾い上げ握ると、歯を剥き出しにして向かつてくる怪物の顔に向かつて思いつきり殴りつけた。

すると、怪物は後ろに倒れ込み体を痙攣させた。

やはりコイツらはゾンビの様に頭が弱点らしい、なら人間の様に固

い石で殴られれば脳震盪も起ころるわけだ。

そして脳震盪を起こしてゐる間は当然だが怪物は動かない、その隙に俺は怪物に跨ると、手に持つた石を大きく上へと持ち上げる。

その瞬間、目の前の怪物と目が合つた。

きっとこんな風になる前は優しい人だったのだろう、温和な印象を与えるその顔の口元には肉片がつき、血を滴らせながら俺を睨みつけるその目に、俺は勢いよく石を叩きつけた。

「……申し訳ないけど、使わせて貰います」

数人の怪物を殴り飛ばし殺した俺は、さつきまで食われていた警官の近くまで行くと、警官が身につけていたベルトを外し、そのまま自分の体へと取り付けた。

ベルトには警棒や無線機があり、きっとこんな石よりは役に立つだろう。

しかし何故か拳銃だけはベルトのケースの部分に無く、辺りを見渡すと少し離れた位置に落ちていた。

落ちていた拳銃を拾い上げ、手に取り中身を確認すると、拳銃には不思議な事に球が全弾入つっていた。

しかしそんな事を気にしてゐる場合じゃない、拳銃には弾は五発、それにベルトには弾を入れるケースも付いていて、後二十発はあると思う。

……こんな事して、事態が収まつたら確実に俺は捕まるな。
まあ既に殺人をしてる訳だし、気にするのも今更か……。

「！ ラプラス、何してんだ」

警官からの装備を身につけた後、学校の方へ向くとそこには学校の中を徘徊する怪物の姿が見えた。

その姿に激しい怒りを覚え、拳銃を強く握り締めながら一步を踏み出す俺を、またしてもラプラスが今度は前から抱き着き、止めてきた。
「ぜつだいに、いがせないんだ！」

ラプラスの顔は涙でぐしゃぐしゃで、体は強く強張り震えていた。こうしている間にも沙花又は危険に晒されている、もしかしたら本当にラプラスの言う様に手遅れになるかもしれない。

「お前いい加減に……！」

「わがはいは……八一が昔から好きだ！　ずっと昔から大好きだった！」

「……は？」

「こいつ、こんな一刻の猶予もない時に何言つてんだ。

大体、こいつと会つたのは今日が初めてだった筈……。

「まだ吾輩が小学生の頃、八一は一人ぼっちだつた吾輩とよく遊んでくれていたんだ！　嬉しかつた、ずっと一緒に居たかつた！　でも八一は……どんどん吾輩から離れていつて……勇気を出して声を掛けようとした時にはもう沙花又が居て……それがすごく悔しくて……！」

それで吾輩は名前も服装も全部変えて……そしたらまた一人ぼっちになつたんだ……でも今の吾輩なら八一は昔みみたいに一緒にいてくれると思つた！　だから頑張つて沙花又と友達になつて関わりを作つたのに……八一は、気づいてもくれなかつた……。

でも、八一はやっぱり変わつてなかつたんだ……あの時一人で外に出ようとした吾輩に、着いてきてくれた！　だから、だから吾輩は……！」

ラプラスは叫ぶ様に、心の奥底に溜まつていただろう想いを吐き出した。

そして最後には、消え入りそうな声で俺の胸の中で言葉を漏らした。
「八一に……死んでほしくない……！」
「……」

ラプラスは俺の胸に抱きつき、泣きじやくる。

側から見れば妹が兄に泣きついている様にも見えるだろう、それ程までに小さな体で、小さな背中だ。

だから俺は今度は優しくラプラスを引き剥がし、涙で潤んだラプラスの目をしつかりと見つめて伝えた。

「ごめんな、それでも俺は沙花叉を助けに行く」

その時、車の音と共にパトカーが俺たちのすぐ側で止まつた。

そしてパトカーからは一人の女の警官が出て来て、俺たちに駆け寄つて来た。

「貴方達、何をしてるの!? 早く乗りなさい!」

「すみません、俺はまだやる事があつて、先にこいつをお願いします」

「!? お嬢ちゃん! 早くこっちに来て!」

駆け寄つて来た女の警官は、俺の付けているベルトの拳銃に目をやると、血相を変えてラプラスを車に連れて行つた。

まあこんな状況で俺みたいな一般人が拳銃を持つていたら、どう考えても危険だし、車には乗せないよな。

ただ今の俺には、これ以上有難いことはない。

「い、いやだ! 離して!!」

「あ、暴れないの! 早く逃げるわよ!」

「だ、だつたら八一も! お願ひします八一も助けて下さい!」

「いいから早く来なさい!」

力任せに暴れるラプラスだが、流石に同じ女でも向こうは警察官だ、敵うはずなくラプラスはパトカーに乗せられ、警官は直ぐに運転席に行くと車を発進させた。

これで一先ずラプラスは安全だろう。

……大丈夫だラプラス、俺はこんな事じや死はないさ。

「……沙花叉、今助けに行くからな」

そうして俺は、先程のやり取りで学校から出て来た怪物達に向かつて、拳銃を構えると、重い引き金を引き切つた。

第一章 学校編

第一話 怪物

「くそつ、これじゃあ身動きが……」

ラプラスと別れてから、俺は拳銃の弾が尽きる限り群がつてくるゾンビ達を撃ち続けた。

その中には、俺と同じ制服を着た男や女も居たが……もう誰の目から見ても手遅れなのは明らかだつた。

そうして慣れない拳銃を撃ち続けても尚、次から次へと何処からかやつて来るゾンビ達から、俺は用済みの銃を投げ捨て校舎内のトイレに身を隠していた。

しかし時間が経つにつれ、校舎内のゾンビ達の数はどんどん増しているようを感じる。

しかも増えているのはこの高校の制服を着た奴らばかりだ、ということは……恐らくは……

「俺みたいに隠れている奴ら……だつた」

正直……ラプラスの言う通り手遅れだと感じている自分がいる。

果たしてこの地獄みたいな状況で沙花又は生きているんだろうか？……そんな事ばかりが頭の中で留まり続けている。

俺はあいつがあんな風に変わり果てた姿なんて見たくない。

「……死んで欲しくない、か」

さつきラプラスに言われた言葉。

子供みたいに泣きじやくつて細い腕に入れ、一生懸命俺を抱きしめていたラプラス。

そんなあいつに俺は……約束したはずだろ。

沙花叉を助けに行くつて。

「……よし、もう弱音は無しだ」

拳を強く握り締め、そう決意する。

助けるんだ、必ず何があつても……そう約束したもんな。

「よし！ 行く」

「はあはあ……!! だ、誰か居ないでござるか!? 居たら開けて欲しいでござるつ!!」

俺が扉に手をかけた瞬間、扉の向こうから聞き馴染みのある声が聞こえて来た。

しかしその声色は怯えや恐怖が混じり、今この瞬間にも崩れ去つてしまいそうなほど必死だった。

「い、いろは!?

向こうにいるのがいろはだと気付いた俺は扉の鍵を素早く開けた、すると小柄な影が俺の隣を横切り、後ろに倒れ込む音が聞こえた。そして扉の向こうの廊下にはゾンビの群れが押し寄せており、俺は直ぐに扉を閉め鍵を掛けるのと同時に、扉には肉がちぎれ骨が浮き出た無数の腕が勢いよく音を立てて張り付いた。

「いろは、おい！ 大丈夫か？」

「はあはあはあ……！ 八、八一……くん？」

「そうだ、一体何……がつ……」

いろはの方に向き直った俺はその異様な姿に言葉が詰まつてしまつた。

着ている制服やスカート、そして綺麗な金色の髪と手に握り締めている木刀には赤黒い血がべつとりと塗りたくられたように付着していて、水色の目と声だけが目の前にいるのが風真いろはなのだと教えてくれた。

「八一君……風真是……かざ……まはつ」

「落ち着け、大丈夫だ」

何かを言おうとしたいろはを俺は抱き締める。

生臭い鉄の香りと、ペンキのように粘り気のある血が着ている制服に染み込んで来るが、そんなのどうだつて良い。

いろははきつと戦つたんだ。

あのゾンビ達から誰かを守る為に、自分の命よりも優先して立ち向かつたのだろう。

そうじやなきや、ここまで血で染まる事なんてあり得ないはずだ。

「よくやつた、もう大丈夫だ」

「うつぐ……ひつく、八一君……一体何が起こつてるんでござるか？」

「俺にもよく分からぬが取り敢えず無事で良かつた」

「みんな……みんなおかしくなつちやつたでござる、風真も……あんな事したくななかつたのに……つ……」

「落ち着け、一体何があつたんだ？」

風真是俺の質問に少し間を置いて答え始めた。

扉に押し寄せるゾンビの呻き声が辺りを埋め尽くす中、俺は風真の話に耳を澄ませた。

「最初は何が起きたか分からなかつたでござる……」

「数十年前、ラプラスを除く四人の教室にて」

「もう本つ當にあり得ないつ！ 八一のバカ！ こんな可愛い沙花又が隣にいるのにいー！」

「……あれ、どうするでござるか？」

「こよりが考えるにあのクロエちゃんには近づかない方が賢明じやないですかねえ……」

「まあ結局八一君からは何も原因が聞き出せなかつたしね、はあ……」

八一君と別れた風真達は自分の教室に帰つて來ていたでござる。

風真的座る席は沙花又の一個後ろの席なんでござるが……流石に

あの状態の沙花叉には風真も近寄りたくないでの、こよちやんとルイ姉がいる廊下側の席にお邪魔してゐるでござる。

「それにしてもあそこまで沙花叉が怒つてゐるのを見たのは風真是初めてでござる、多分二人もそうだと思うのでござるが……」

「そうだね、お風呂に入る前はしょっちゅう機嫌が悪くなるけど、あそこまでの私は私も初めて見たかな」

「やっぱり八一君絡みでござるか？」

「そうじやない？ 当の本人は無関心みたいだけど……」

「こよもあんまり人に興味が無い様に見えましたー、それともツンデレなだけですかね？ 何だかんだクロちゃんとは長い付き合いみたいですし」

うーん……こよちやんの意見に少し疑問を感じる。

風真と二人で話していた八一君は冷たい印象は受けなかつたし、寧ろ優しく話し易い人だと感じたでござる。

でもあの教室での八一君は確かに何処か無関心に見えた、でもそれは沙花叉を嫌つての物じやなくて……寧ろ思春期の妹に手を焼くお兄ちゃん的な感じだつたでござる。

まあ八一君も少し言葉が刺々しかつたでござるが……。

「はーい、ホームルーム始めますので席に着いてくださいーい」

黒板の前の席で作業していた先生が腕時計を確認すると、少し気怠げに教室内に居る生徒達にそう声を掛けた。

それを聞いてこよちやんとルイ姉は廊下側の席に座り……風真是沙花叉の一個後ろの席に腰を落としたでござる。

……廊下側の二人が同情した目で見てくるでござる。

「……いろはちゃん」

「な、何でござるか？」

「……後で木刀貸して」

「ダ、ダメでござるよ！ 木刀で何をする氣でござるか！」

「……掃除？」

「木刀を使う掃除なんて聞いた事ないでござるう！？」

「そこー、静かにしないと廊下に立たせちゃいますよー」

先生のやる気ない注意に慌てて椅子を引いて勢いよく立ち頭を下げる。

すると先生は、はいはい座つて座つて、と本当に教師なのか疑う程適當な事を言い、風真が座ると何事もなかつた様にホームルームを始めた。

ホームルームと言つても一言二言だけで適当に済ませた秋田先生は、風真達に入学式まで教室に居るように伝えると、そのまま教室から出て行つてしまつた。

そうして秋田先生が居なくなつた教室はまた数分前と同じ様に仲良い人同士で話しているという、普通の何処にでもある教室の光景になつたでござる。

でも……話す内容はさつきとはまるで違うものだつた。

「あれやばくない？ 何台来てんの？」

ホームルームが終わつて、沙花又の席に集まつた風真達三人は隣の席の女の子が指差す窓の外を見つめていたでござる。

普通なら携帯をいじるか、友達と話す様な空き時間。

それなのに風真達の他にも教室内の殆どの生徒が窓の外をじつと見つめ、今まで一台通り過ぎるパトカーを目で追つていたでござる。「何かこの近くで殺人があつたみたい、10人以上の死亡が確認されてるつて書いてある」

「じゅ、10人!? 大変でござるじやないでござるか！」

「落ち着いていろはちゃん!? ござるがおかしくなつてる！」

「……八一、何してんのかな」

あわあわと慌てる風真をこよちゃんも焦つた様子でツッコむ。

そんな風真達を他所に沙花又は窓の外をただジツと見つめて、偶に八一君の名前を呼んでは溜息を吐いているでござる。

ルイ姉はスマホで何か調べてるみたいでござるが……あ、充電切れだ。

「くつ……私とした事が」

「いやいつもそんな感じでござる」

「いろは辛辣ー……」

そうして風真達が少しづつ外の光景を忘れて、いつもの様に他愛もない話をしていると……

ガラガラっ！ とそんな大きな音を立てて少しだけ汗をかいた秋田先生が、教室を見渡して驚く風真達を置き去りにこう言つた。

「みんな、全員いる!? 誰かトイレに行つた人とか居ない?」

「え、えつと……多分いないでござる」

「そう、分かつた。悪いけど今は絶対に教室から出ないで」

「秋田先生つ！」

教室のドアに手を付きながら話していた秋田先生の横から、女性の人が息を荒げながら秋田先生に話しかける。

「川島先生……？ 何かありましたか？」

「うちの……うちのクラスの生徒が二人居ないんです……同じクラスの子の話だと、外に出たみたいで……」

「……取り敢えず警察の方々に今は任せましょう」

「で、でもっ！ その子達に何かあつたら……！」

「川島先生」

「つ！ ……はい、分かりました……」

教室のドアを閉じて廊下で話している二人の先生の声は完璧には聞こえないでござるが、それでも何となく話は分かつてしまふものでござる。

確かにあの川島先生のクラスには八一君とラプちゃんが居た筈でござる、もしも……もしも外に出た二人というのがその二人なら……。
「沙花叉、八一君に電話」

ルイ姉がいち早く沙花叉に声を掛ける。

「もうやつてる…………ダメ、出ない」

「ラプちゃんの方はどうでござるか?」

「…………」フルフル

「確定だね」

そう、この時点では居なくなつた二人が確定してしまつた。

もし八一君とラプちゃんが教室に今も居るなら電話に出ない訳がない、という事は……あの二人は外に出てるという事。

「……つばか八一！」

沙花叉が音を立てて椅子から立ち上がる。

そんな沙花叉を風真もこよちやんもルイ姉も、それそれが違う場所を掴んで足を止めさせる。

「離してっ！」

「離せるわけないでござる」

「そうだよ、クロちゃん」

「ラプラスには八一君が付いてる、何が起きてるか分からなければならきつと大丈夫だよ」

「それでもつ……八一に何かあつたら、沙花叉はっ……！」

3人に止められて沙花叉は大人しく自分の席に座り直す。

「……一人が心配な気持ちは風真も同じ、でもここで沙花叉を行かせる訳にはいかないでござる」

「……」

「そんな事したらきつと後で八一君に怒られてしまうでござるからなつ！」

「……ふつ、なにそれ」

「確かにあの顔で睨まれたらこよ……腰抜かしちゃうかも」

「どつかの総帥なら泣き出しちゃうかもね、私はそう推理するよ」

ルイ姉……すべつてるでござる。

まあでもルイ姉の寒いギヤグもさつきまで怖い顔をしていた沙花叉が笑ってるのを見ると、偶には良いものだと思うでござるな。

しかし、そんな風真達の笑い声を遮る様に廊下の奥から慌ただしい足音が聞こえたかと思うと、窓の遠くから拳銃の発砲音が窓を突き抜け、教室の中に響き渡った。